

「英語教育改善プラン」に基づいた教員の英語力・指導力向上に向けた取組

「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～京都府～

課題とその分析

- 教員の英語指導力向上と授業における生徒の英語による言語活動時間の充実（教員研修の充実と授業改善の実施）
- 学習到達目標（CAN-DO形式）の整備とパフォーマンステストの実施（総合的な英語力を高める指導と評価の一体化）

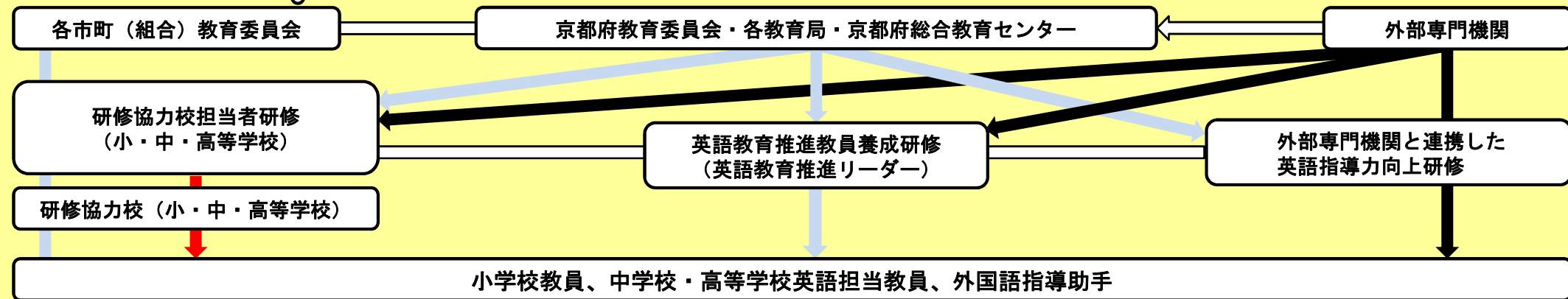
課題解決に向けた具体的な対策

- 英語教育改善プランに基づき、明確な目標を設定した上で、大学等の外部専門機関及び英語教育推進リーダー等と連携して、効果的な研修を行うことができる体制を構築するとともに、小学校の中核教員や中・高等学校の英語担当教員等を対象とした研修等を実施し府内の英語教育の充実を図る。

具体的な取組内容

※府教育委員会が中心となり、各教育局や各市町（組合）教育委員会と連携のもと、府内の小・中・高等学校（12校）を研修協力校として指定するとともに、大学等の外部専門機関や府総合教育センターとの連携を通じて、総合的な研修体制を構築することにより、英語教育推進リーダーによる研修に加え、各校種における系統立てた研修等が可能となった。

①研修体制の構築



②研修講座の実施

※主なものを掲載

- 【取組 1】英語教育推進教員養成研修（英語教育推進リーダー研修実習）（小・中・高等学校）
 - ・中央研修の成果を普及することなどを通じて中核教員を養成
- 【取組 2】教育課程研究協議会（小・中・高等学校）
 - ・指導方法や評価の在り方等の研究を通じて授業改善などを推進
- 【取組 3】府総合教育センター研修（小・中学校・高等学校）
 - ・新教材の有効な活用方法や小中接続の在り方などに関する講義・演習等を通じて教員の英語指導力を向上
- 【取組 4】研修協力校担当者研修（小・中・高等学校）
 - ・CAN-DOリストの活用方法等に関する研修を通じて指導と評価の改善などを推進
- 【取組 5】研修協力校による授業公開研修（小・高等学校）
 - ・公開授業等を通じて英語による授業の進め方、効果的なパフォーマンステスト及びその評価、CAN-DOリストの活用などの研究成果を発信

◎各種研修会等での実施報告、HP等での情報発信などにより成果を普及

③成果と課題、今後の方向性

求められる英語力を有する 教員の割合（H29）の向上 中学校教員 42.5% （H26 27.6%） 高等学校教員 63.8% （H26 58.6%）	授業における生徒の英語による 言語活動時間の占める割合（H29）の向上 中学校 62.3% （H26 40.9%） 高等学校 25.5% （H26 24.7%）
学習到達目標の設定（H29）の向上 中学校 69.8% （H26 22.7%） 高等学校 40.0% （H26 16.5%） <small>※高等学校は平成31年度に100%達成見込み。</small>	パフォーマンステスト （スピーキング）回数（H29）の向上 中学校 3.4回 （H28 2.8回） 高等学校 2.2回 （H28 1.28回） <small>※高等学校はコミュニケーション英語Ⅰ</small>

◎今後さらに府内の英語教育を充実するためには、教員の英語力・指導力の向上が不可欠

- より実践を意識した取組となるよう、民間企業と連携した「聞く・話す」中心のセミナーを実施するなど、研修内容等を一層充実

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・児童に質の良い音声を聞かせ、児童の理解を助け、表現にさらなる広がりをもたせるため、ICT機器を活用する
- ・パフォーマンス評価の実施に向けて、ルーブリック及びCAN-DOリストを作成し、その妥当性を検証する

具体の取組の内容

- ・1～4年生 … 45分の授業(年間20～35時間)
【活動型、「話す」「聞く」の音声指導中心】
- ・5～6年生 … 週1コマ45分の授業(45～50時間)＋総学時(15時間)
【活動型、「話す」「聞く」中心＋初歩的な「書く」】
- ・イングリッシュウィークの実施
… 短時間学習 10分×4日(月に1週間、水曜日以外)
- ・イングリッシュヴィレッジの実施
… 英語体験活動(1学期に5年生、2学期に4年生、3学期に6年生)
- ・公開授業の実施 … 各学年1学級公開
電子辞書やICT機器を活用した授業実践の提案、検討
- ・ルーブリックの作成、検討
- ・変則6校時、4校時の実施



成果①

- ・ICT機器の活用方法について
語彙や表現の見本、活動の流れや活動方法のモデルの提示等で、デジタル教材やビデオ、スライド等を活用した。
質の良い音声を聞いたり、視覚的に理解を補助することができ、効果的だった。
- ・電子辞書の活用方法について
児童が、自身の言いたいことを自分で調べ、音声で確認することができるので、有効だった。しかし、クイズのような相手が理解しないと成立しない活動には不適切であるため、使い方には検討が必要である。

成果②

- ・評価について
ルーブリック等を作成し、その妥当性について検討する校内研究会を開くことができた。しかし、完成させ、実際に指導や評価に活用することはできなかった。
- ・児童、指導者について
昨年度よりも、外国語活動の時数を増やしたことにより、児童の外国語の語彙数や発話量が増え、外国語でやりとりすることに対する抵抗感がより低くなった。
また、指導者についても、外国語活動の授業の進め方がスムーズになり、内容についても深まってきた。

今後の課題・方向性

- ①評価計画の作成と実施
…ルーブリックやCAN-DOリストの作成とそのCAN-DOリストを活用した指導と評価の一体化の研究
- ②小中連携の推進
…中学校との接続を意識した具体的な指導方法の研究
- ③電子辞書やICT機器の活用
…指導者の負担を減らし、児童の意欲や技能定着につながる活用方法の研究
- ④外国語科・外国語活動の指導時数増加における効果的なカリキュラムマネジメントの研究

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・加配やALT任せの授業 ⇒ 段階を経て加配、ALT主体から担任主体の指導へ移行させる。
- ・学級担任ではなく、ALTや加配による授業案作成 ⇒ 学級担任が学習活動計画案を基に、授業案を作成する。

具体の取組の内容

- ①学期ごとに、指導の主体を、加配・ALTから学級担任に移行（T1、T2の役割の明確化）
 - 1学期・・・加配・ALT主体の授業、学級担任はT2
 - 2学期・・・主体を学級担任へ移行、授業案作成は加配・ALT
 - 3学期・・・文部科学省から出されている学習活動計画を基に、学級担任が授業案を作成し、指導を行う。
- ②校内研修の充実
 - ・クラスルームイングリッシュ表を作成し、それを基に会話をしたり、インフォメーションギャップを意識した自己紹介等で英語を使う機会を設けた。
 - ・毎月、ミニ研修を設け、10分～15分程度自由参加でSmall Talkやアルファベットの音読み、絵本の読み聞かせなどについて伝達している。
- ③校内環境の整備
 - ・既習内容の掲示（廊下壁面や階段等）
 - ・英語の絵本の整備
 - ・デジタル教材の整備（3～6年の各学年に大型TVを設置し、それぞれにデジタル教材を配備）

成果①

教師の変容

- ①毎時間、授業の流れを提示して授業を進めていくことで、授業の流れを学級担任が理解できるようになった。
- ②学級担任が主体となり、ALTや加配と連携しながら授業を進めていくことができるようになってきている。
- ③授業を主体的に進めていく中で、積極的にクラスルームイングリッシュを使っているため、学級担任の英語力が向上している。

成果②

児童の変容

- ①外国語の授業において、積極的なコミュニケーション活動が見られる。
- ②授業において、男女関わらず楽しく活動している。
- ③授業以外でも、ALTや加配に対して、英語の既習内容を使う姿が多々見られる。
- ④話されている英語が、ある程度理解できていなくても大丈夫な耐性ができてきた。

今後の課題・方向性

- ①授業力向上
 - ・校内研修の充実
 - ・外部講師や小、中連携の強化
 - ・教材研究
 - ・英語力向上
- ②評価に関する研修
 - ・CAN-DOリスト作成
 - ・パフォーマンス評価を実施するにあたり、ルーブリックの作成
- ③校内環境の整備
 - ・絵本の購入と整備
 - ・校内に英語の表現の掲示を増やす。
- ④英語を活用できる機会の設定
 - ・社会見学や行事を活用し、英語を活用できる機会を設定する。

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・今までの外国語活動の評価と同じように、行動観察が主な評価の指標となっているため、特に教科化される高学年での評価方法の工夫改善が必要である。
- ・昨年度までは自作の教材で授業を行ってきたが、新教材が出されたためそれをふまえた教材研究と年間計画の見直しが必要である。

具体の取組の内容

取組① 評価方法の工夫・改善

- ・学年到達目標、CAN-DOリストと単元目標等との整合性を高め、各単元末にパフォーマンス課題の設定、パフォーマンステストの実施、またそれに対応したルーブリックの作成。
- ・CAN-DO方式を使った振り返りワークシートの作成。
- ・「聞く・読む・書く」力を測る形成チェックシート(各学期末に取り組むペーパーテスト)の作成。

取組② 「感動」のある授業

- ・新教材を生かし、児童の実態に合わせた、できた、わかったを味わえる授業。
- ・必然性の高いActivityを行うことで児童のやってみよう(聞いてみたい・書いてみたい・読んでみたい)を引き出す。
- ・ネイティブスピーカーに触れる体験(交流学习の実施)

取組③ 公開授業研究会の実施 校内研修会の実施

- ・「小学校英語教育ハンドブック」を活用した研究成果の波及と自校教職員の指導力向上を目的とした研究会・研修会の実施。



成果①

評価方法の工夫・改善

- ・5・6年生の全Unitにおけるパフォーマンス課題の設定とそれに対応したルーブリックの作成、各学期における形成チェックシートを作成することができた。

【本校英語教育に関わる教師へのアンケートより】

- ・ルーブリックを活用して、評価をすることができる。
…肯定的に答えた割合 100%
- ・形成チェックシートの内容は、学期末に目指す児童の力を示すものにもなっていると思う。
…肯定的に答えた割合 100%

- ・ルーブリックを児童と共有することで、児童のモチベーションを上げ、よりよいコミュニケーションをとろうと工夫する児童の姿が見られた。

成果②

児童の意欲を引き出す授業

- 【児童アンケートより】 ※肯定的に答えた割合
- ・外国語科・外国語活動は楽しいですか。
5・6年生…87% 3・4年生…87%
 - ・外国語科・外国語活動の学習はわかりますか。
5・6年生…93% 3・4年生…87%
 - ・学んだことが力になっていますか。
5・6年生…91% 3・4年生…90%

- ・多くの児童が意欲的に学習に取り組み、力を付けてきている。

成果③

研究成果の波及

- 【参加者アンケートより】
- ・参考になることがあったと答えた割合…100%
 - ・広く研究成果を波及することができた。

今後の課題・方向性

今後の課題として大きく3点あると考えている。

まず1つ目は、パフォーマンス評価についてである。パフォーマンス課題の設定はしたが、テストとして実施していないUnitもある。また、やりとりのパフォーマンステストは、実施時間の確保が難しい。今後は、どのUnitでパフォーマンステストを実施するのか、内容は適切か等を再検討していく必要がある。さらに、4技能統合型の課題設定や複数のUnitを統括したような課題設定の工夫をしていきたい。

2つ目は、ルーブリックの妥当性の検証が十分でないことである。校内研修会等を生かして、ルーブリックを活用した教師の評価スキルを高めていきたいと考えている。

3つ目は、「感動」のある授業の実現有効な場として、交流学习の実施を計画してきているが、なかなか交流相手の確保が難しいことである。長く安定して交流することができる相手を探し、本校の外国語科・外国語活動の学習に生かせるようにしていきたい。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～舞鶴市立志楽小学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・ 児童の「主体性」「表現力」に課題が見られるため、『主体的に学び、豊かにコミュニケーションを図る児童』の育成～自ら考え、発信する子どもを目指して～』を研究主題とし、児童が主体的に取り組める活動、コミュニケーションをとることが楽しいと思える授業づくりに取り組む。
- ・ 外国語の授業に対して自信がない教員もいるため、教員の授業力向上のための取組を行う。

具体的取組の内容

- ・ 週1回のミニ研修(1学期:クラスルームイングリッシュ、2学期:スモールトーク・絵本の読み聞かせ)を行った。
- ・ 夏休み中の校内研究会では、学級担任がT1となってアクティビティーを進める方法やフォニックスの指導、書く活動の進め方について研修を行った。
- ・ 研究授業を通して、学級担任がT1となる授業の進め方について研究を深めた。
- ・ 英語専科加配が中心となり、英語での指示をすべて書き込んだ指導案を毎回作成した。
- ・ 「クラスルームイングリッシュシート」「アクティビティー集」「絵本リスト」を作成し、授業づくりに活かした。
- ・ スポーツや動物など、身近にあるものの英語表現を掲示したり、「Shiraku英会話あいうえお」を作成して全校放送で流したりするなど、日常的に外国語に触れる機会をつくった。
- ・ 朝の会の「コミュニケーションタイム」、隔週水曜日の「ことばタイム」を通じて、コミュニケーションの土台となる語彙力や表現力を高めた。

成果①

- 児童の外国語に対する意欲の向上
 - ・ 児童アンケートの「外国語の授業が好き」という項目において、低・中学年の96%の児童が、高学年の89%の児童が「強く思う」「そう思う」と答えている。
 - ・ 「外国語を使って、ほかの人とコミュニケーションをとるのは楽しい」という項目では、低学年93%、中学年では89%、高学年では91%の児童が肯定的な回答をしており、英語でのコミュニケーションを楽しんでいる児童が多いことがわかる。

成果②

- 教員自身の授業力の向上
 - ・ 1学期は英語専科加配がT1で授業を進めてきたが、2学期以降、学級担任がT1となって授業を進めるようになった。
 - ・ できるだけ多くのクラスルームイングリッシュを使って授業を行うことができるようになった。
 - ・ T1とT2の役割分担を効果的に行えるようになった。

今後の課題・方向性

- ① 授業時間に対して学習内容が多く、「授業についていけない」と感じる児童がいる。
 - 学習する単語やフレーズを精選し、授業時間内で習得できるよう年間・単元計画を立てる。
 - 学習に対する意欲と主体性を高めるために、必然性のある活動を設定する。
- ② 学級担任のさらなる授業力の向上が求められる。
 - 学年で授業内容を考える時間を設定する。
 - スモールトークや「読む」「書く」活動の進め方に関する校内研修を実施する。

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・教員の指導力及び授業計画・見通しのある授業 ⇒ 研究の場の設定
- ・児童の英語への慣れ親しみ度ややり取りの中での即興性 ⇒ 学習活動の帯での設定
- ・既習事項の実践の場や英語活用への意欲 ⇒ 国際交流の活用

具体の取組の内容

- ①必然性のある場面設定とゴールを明確にした単元計画づくり
 - ・英語を使用する必然性のある活動を単元ゴールの言語活動に設定し、そこから逆向きに単元を組み立て、児童に無理なく確かな力を付ける。
- ②Small TalkとEnglish Mini Talk
 - ・帯で時間を取り、既習表現の定着と会話を継続させる力を付ける。また、4年生には高学年のSmall TalkにつながるEnglish Mini Talkを導入する。
- ③毎週金曜日15分間のEnglish Time
 - ・既習表現を使用したゲームや絵本の読み聞かせなどを行い、英語に慣れ親しませる。
- ④毎週金曜日45分間の校内研修
 - ・英語に関わる研修を行う時間を毎週確保する。
- ⑤ニュージーランドの児童との交流
 - ・電子黒板を活用してライブ交流を行うなど、既習表現を使用してコミュニケーションを図る場を設定する。

成果①

【意識アンケート結果】 H29とH30(1学期)との比較

①教員の変容

- ・外国語活動の時間が楽しいか
(H29)36% ⇒ (H30)100%
- ・自信をもって授業を行っているか
(H29)36% ⇒ (H30)60%
- ・AETとコミュニケーションをとっているか
(H29)27% ⇒ (H30)100%
- ・児童やAETにレスポンスをしているか
(H29)66% ⇒ (H30)100%

②児童の変容

- ・英語の授業は好きか
(H29)84% ⇒ (H30)83%
- ・分からないことは進んで聞いているか
(H29)77% ⇒ (H30)94%
- ・知っている単語は増えたか
(H29)84% ⇒ (H30)90%
- ・誰にでも進んであいさつしているか
(H29)87% ⇒ (H30)93%

成果②

- ①指導者が意図をもって毎回の授業を仕組むことができるようになった。また、児童が意欲的に活動に臨むようになった。
- ②高学年はコミュニケーション・ストラテジーをいくつか身に付け、3往復程度のやり取りを行えるようになった。また、4年生においても会話を続けようとする意欲・姿勢が見られるようになった。
- ③5・6年生の全児童がニュージーランドの児童と英語を使った交流を行うことができた。また、児童は英語が伝わる喜びと伝えることの難しさを感じることができた。

今後の課題・方向性

- ①必然性を意識したアウトプット・インタラクションは一定成果が見えたが、児童にとってのよりよいインプットについては、不明確である。
⇒質の高いインプットの可能性を追究する。
- ②次期学習指導要領にそった目標と評価については、研究を深められていない。
⇒目標と指導と評価の一体化を図り、児童の意欲を引き出す評価の在り方を追究する。
- ③国際交流を行う際に時間、労力を要する。
⇒誰でもできる国際交流の形を作り、簡単に継続して行える方法をマニュアル化する。
- ④中学校との情報共有や接続が不十分である。
⇒授業を通しての小中連携を進める。

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・小学校の外国語活動と中学校英語科とのスムーズな接続
- ・中学校におけるCAN-DOリストを見直し、実際に活用した実践を行う。

具体の取組の内容

- ・中学校における学習到達目標(CAN-DOリスト)の効果的な活用及びパフォーマンステスト実施に向けたルーブリックの作成
- ・小学校の研究授業への参加
- ・小学校研究発表会に参加し、小中接続について検証

成果①

- ・既存の学習到達目標を小学校の接続を視点に見直した。
- ・学習到達目標に沿った、授業展開を考え、実践できた。

成果②

- ・小学校の授業に参加することで、現状の外国語活動について、目標を理解できた。
- ・外国語活動の中学年への移行と高学年への移行の内容が理解できた。
- ・中学校での授業改善の視点を持てた。

今後の課題・方向性

- ①市内中学校で共通のCAN-DOリストの作成と授業実践に基づいた改善
- ②小学校のCAN-DOリストをもとにした中学校のリストの改善
- ③小学校との接続を意識した具体的な中学校における授業実践、指導方法の研究

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・即興性の育成を目指して、Small Talkの機会の充実
- ・会話を繋げる為のフレーズ指導及び教師も生徒も授業内で出来るだけ英語を使用するための教材の工夫改善

具体の取組の内容

- 校内の英語科共通の取組
 - ①各学年終了時のCAN-DOリストを作成し、目指すゴールの共通認識
 - ②CAN-DOリストに関連づけ、パフォーマンス課題の設定・ルーブリックの作成手順や観点の共通認識
 - ③単元を見通した自己評価カードの作成(CAN-DOリストを基に)
 - ④Small Talkにて会話を繋げるための教材の工夫
(つなぎ言葉の指導・Follow-up Questionの指導、Mind Map・Conversation Mapの活用)
 - ⑤英語検定試験に向けた取組
 - ⑥AETとの授業外での会話場面を設定
 - ⑦文法説明など以外はAll Englishを目指した授業実践
- 授業公開・研修会
 - ①4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力の育成を視点に置いた授業公開 (2年2組) 平成30年11月
 - ②市授業力向上研修における授業公開 (3年1組) 平成30年12月

成果①

- ①意識調査(アンケート)
 - ・英語の授業について
肯定的に捉えている生徒の割合 約70%
 - ・英語の授業内での教師の英語使用率
(生徒の実感として) 約70%
 - ・英語の授業内での生徒の英語使用率
(生徒の実感として) 約50%
- ②外部試験を活用した英語力
 - ・3級受験者 第1回18人 合格者13人
第2回21人 合格者13人
 - ・領域
2018年英語検定第1回と第2回を比較すると、第2回がListeningにおいて全体平均を上回った。

成果②

- ①英検受験者数の増加
 - ・第2学年の生徒は本年度、学年全体の3分の1以上が自主的に受験している。
- ②授業での前向きな姿勢
【授業公開後の事後研より】
 - ・生徒たち誰もが英語を話そうとしている。
 - ・自分たちだけで、会話を続けている。
 - ・生き生きと英語を話す姿があり、わかろうとしている。
- ③家庭学習の充実
 - ・英語の歌を好んで訳したり、知らない単語を必ずメモする習慣がある。

今後の課題・方向性

- ・単元を見通したパフォーマンス課題の設定及びルーブリックの作成・活用を基に、生徒にも指導の流れと評価が見える授業を目指す。
- ・生徒が授業において英語を使っていると実感できる活動を取り入れ、生徒アンケートにおいて「授業内で70%以上は英語を使用している」と振り返るような授業を目指す。
- ・全教員が授業の運営を基本的に英語で行い、母語による理解が必要な場面は日本語で話すというメリハリのある、わかる授業を目指す。

現状の課題と課題解決のための手立て

課題: 豊かなコミュニケーション力を育成するための授業づくり
手立て: 「英語を使って何ができるのか」を柱にした授業実践の取組

具体の取組の内容

(1) オールイングリッシュ授業の展開及び「聞く」「話す」を中心とした小学校での学びを大切にする授業改善(小中接続)

「聞く」「話す」を中心とした言語活動の充実を一層図る等、小学校での学びを大切にした指導を心がけ、小学校英語において培った「臆せず英語を話し、英語学習を楽しむ」という姿勢や意識を更に高めることをねらった。また、基本的に英語で授業を進めたり、生徒に多くの英語を話す機会を与える「オールイングリッシュ」授業を展開したりした。

(2) パフォーマンステストの開発及びルーブリックの設定(中高接続)

パフォーマンステストについて先進的に研究を進めていた園部高等学校と連携し、その開発及び評価についてのルーブリックの研究を進めた。テスト作成においては、必然性のある場面設定、興味・関心が持てる題材、教科書との関連性に留意した。評価についてはルーブリックを「発表」「やりとり・質問に答える」「やりとり・インタビュー」「音読・暗唱」「ライティング」「ディベート」の6つに分け、それぞれ「言語」「内容」「態度」の項目に従って3段階で評価する形式を作成した。

(3) 「書くこと」の指導方法の改善

ブレインマップを活用し、書きたい内容をすぐに書くのではなく、話すことができるように練習を積ませた。「書く」指導の前に「話す」練習を取り入れた。

成果①

(1) 英語学習への高い意欲の持続
「話す」「聞く」を中心とした言語活動の充実を図ることで、平成30年度生徒アンケートによる【英語学習が好きだ】と答えた割合が高い数値を示した。

中1:96% 中2:96% 中3:60%

(2) 英語力の向上

上記の取組を行うことで4技能の総合的な学力が向上している。

H30京都府学力診断テスト(2学年)

本校平均:73.3

京都府平均:63.2

成果②

バックワードデザインを柱とした単元指導計画の作成

CAN-DOリスト及びパフォーマンステストの作成により生徒が目標を明確に持ち、学習に向かうことができている。単元を学習した後に「英語を使って何ができるようになっているのか」を確かめるパフォーマンステストを設定することで、より意欲的に学習することができる生徒が増えていると感じる。平成30年度生徒アンケート結果「英語ができるようになりたい」

中1:96% 中2:100% 中3:83%

今後の課題・方向性

(1) 研究成果の普及

本研究の成果を公開授業や出前研修等を通して市内英語科教員及び京都府英語科教員で共通理解を深める必要がある。

(2) 信頼性と妥当性のあるパフォーマンステストの見直し

より信頼性と妥当性のあるパフォーマンステストへの改善はもちろん、ALTだけではなく、地域に住む外国人や大学などの留学生、京都に来る観光客などの外国人と交流する場面を1つの目標に設定し、更に生徒の学習意欲向上に努める必要がある。

(3) 更なる中高連携の充実

小中だけではなく、高等学校も含めた12年間でコミュニケーション力を育成する必要がある。

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・ 積極的に英語を用いて自分の考えや気持ちなどを伝え合おうとする力 ⇒ 授業における帯活動の工夫
- ・ 英語の長文読解力 ⇒ 教科書本文の内容を材料とした言語活動の工夫

具体の取組の内容

【授業における帯活動の工夫】

- ・ 毎時間の帯活動で、ペアによるQ and A形式の「コミュニケーションタイム」を位置付ける。関心のある事柄や日常的な話題などについて生徒同士伝え合う活動を行う中で、自分が言いたいことを伝えるために、相手に理解してもらうために、どのように表現すればいいのか、「相手意識」を持って表現できる力を養う。

【教科書本文の内容を材料とした言語活動の工夫】

- ・ 教科書本文の書き手の意向を捉えたり、意味や状況を理解したことを基に話したり書いたりする活動を行う。聞いたり読んだりしたことの要点を捉えたうえで、内容を整理し、自分で作成したメモなどを活用しながら口頭で伝え合うなど、技能統合的な言語活動を位置付けることで思考し、表現できる力を養う。

成果①

- ・ 英語でコミュニケーションを図ることが楽しいと感じる生徒が増えた。
→ アンケートの結果から、80%以上の生徒が「楽しい」と回答している。毎時間の継続した取組の成果が表れている。
- ・ まとまった量の文章を読んで情報を理解する力が、徐々に向上している。
→ 各種調査での結果から、「読むこと」における力が少しずつ向上してきている。理解、思考、表現を関連付けた学習活動の効果が表われている。

成果②

- ・ 英語でコミュニケーションを図る際、相づちを打ったり、つなぎ言葉を用いたりするなど、会話を継続・発展させようとする姿勢が見られるようになった。また、様々なテーマを設けることで友達の新たなことを知る機会にもなり、笑顔で積極的にやりとりする姿が多く見られるようになった。
- ・ 人称代名詞をはじめとする代名詞が指し示す内容を理解し、文脈や前後関係を押さえながら読むことが少しずつできるようになってきた。

今後の課題・方向性

- ・ 単に繰り返し活動を行うのではなく、学習到達目標を踏まえ、生徒がコミュニケーションを行う目的や場面、状況などをより意識して学習に臨むことができるよう、どのような活動を行うのかを明確に示す必要がある。
- ・ 生徒同士の伝え合いを通じて、内容を深く理解させたり、考えを明確にし、やりとりしたことを基にして表現する学習過程をより充実させる。また、生徒が学んだことや付けた力を適切に評価するための研究を進める。
- ・ 小学校外国語の教科化を見据え、「英語を使って何ができるようになるか」という観点から小中一貫した学習到達目標を設定する。

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・英語による英語の授業を実施し、生徒の英語による言語活動の充実を図る。
- ・生徒の意欲を高める授業を目指し、外部試験を積極的に活用し技能向上を目指す。

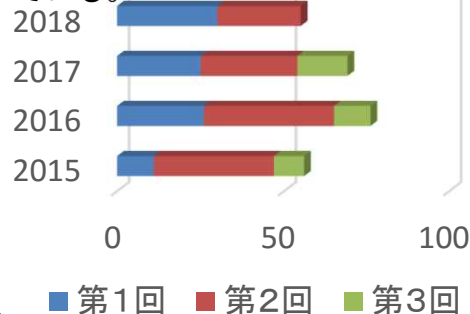
取組の内容

- 外部試験の積極的な受検の推進
- 生徒の英語による言語活動の充実
- 小中連携を意識した授業作りと教員間の交流
- 英語による授業の実施
- ICT機器を活用した授業実践

成果①

外部試験の積極的活用

実用英語技能検定受検者数が安定しており、生徒の興味関心は高い。準2級や3級受検に挑戦する生徒数が増え、高度な英語力を目指す生徒が増えている。



成果②

生徒の英語による言語活動の充実

コミュニケーション活動の充実を図った。また、日常の取組をパフォーマンステスト(プレゼンテーション、スピーキングテスト、ディスカッション)へと発展させ、多様な活動に取り組んだ。また、ライティング活動も英作文はもちろん、成果物を掲示・交流するなどし、生徒の意欲喚起に努めた。また、授業外の時間にALTとの交流を図る“ENGLISH AMBASSADOR”に取り組み、生徒の意欲喚起を図った。また、電子黒板による授業にも取り組み、今後より広く活用を図る。

今後の課題・方向性

①コミュニケーション重視の英語授業の推進

四技能の統合を目指した授業展開を行う。電子黒板を積極的に活用し、より英語に触れられる機会を高める。

②CAN-DOリストの形での学習到達目標の設定と活用

CAN-DOリストの周知を図ったが、それを意識した授業展開とならなかった。今後、到達目標を意識した授業展開を目指していく。

③外部試験のより積極的な活用

より多くの生徒が目標とできるよう働きかけ、積極的な活用を目指す。

現状の課題と課題解決のための手立て

2技能(リーディング・ライティング)中心の授業となっていることが課題であり、リスニングやスピーキングを効果的に組み込むことで、生徒の4技能5領域の力を総合的に育成する授業を目指す。

取組の内容

○多様な音読活動

・様々な音読の手法を学び、各授業の目標や生徒の実態に合った形でそれらを取り入れることで、英文を内在化させることを目指した。

○自己表現活動

・各授業で、英語で自分の意見を述べる等、生徒が自己表現して発信する活動を取り入れた。
・英語プレゼンテーションコンテストを実施した(1年生)。

○公開授業・研修会

・英語科教員8名中6名が公開授業を実施。それぞれの教員が課題を認識し、改善を行った。
・校内で英語科教員向けの研修会を実施。音読や自己表現の活動を中心に学んだ。

成果①

- ◎ 音読等の有効性に対して教員の理解が深まり、リスニングやスピーキング等、音声を使った授業(教員の英語発話・生徒の英語での言語活動の両面での頻度)が増えた。
- ◎ 教員の、自己表現活動を授業に取り入れる意識が高まり、生徒の英語での言語活動(発表、やりとり、書くこと)をより促せた。
- ◎ 英語科全体で研修等に取り組む中で、共通理解が生まれ、指導の方針がより共有できた。

成果②

- ◎ 生徒の英語を使った活動に対する意欲が向上した。
(1年生アンケートより)
・テストではある程度できていても実際に使ってみようとする と全然上手にいかず、本当の意味で理解できていないと感じた。
・人前で英語を話すのは難しいと思っていたけど、やり遂げることができ、自信になった。
・簡潔な文で「伝える」ことができなければ意味がないことが分かった。

今後の課題・方向性

- ①論理的思考力の育成とその評価
 - ・エッセイライティング
 - ・ディベートやディスカッション
 - ・説得力のあるスピーチやプレゼンテーション
- ②CAN-DOリストやルーブリックの活用と改訂
 - ・CAN-DOリストの改善
 - ・ルーブリックの作成と共有(授業での提示や配付)
- ③スピーキングテストの実施
 - ・ルーブリックを使っての適切な評価
 - ・ICTを利用した効率的な実施方法の検討
- ④研究の評価方法
 - ・4技能5領域の総合的な育成の状況の把握方法
 - ・民間英語4技能試験の活用

現状の課題と課題解決のための手立て

(課題) 生徒のスピーキング等の発信力をつけるための、十分な量のアウトプット活動を授業の中で設定すること。

(手立て) 教員による語彙指導や内容理解の指導を工夫して、効果を下げずにインプット活動量を減らすことで時間を捻出し、アウトプット活動を設定する。そうすることで4技能の総合的な育成を目指す。

具体の取組の内容

○インプット活動とアウトプット活動を組み込んだ授業展開

- ・時事に関するオリジナルICT教材を開発し、CALL教室を活用して速読や音読等を通じた効率のよいインプット活動を行った。
- ・生徒が各自のペースで興味を持ったSRA教材や洋書、英字新聞等を多読し、読んだ内容について生徒間で相手に英語で伝え合うスピーキング等のアウトプット活動を行った。

○CAN-DOリストの活用とパフォーマンステストに即したルーブリック作成

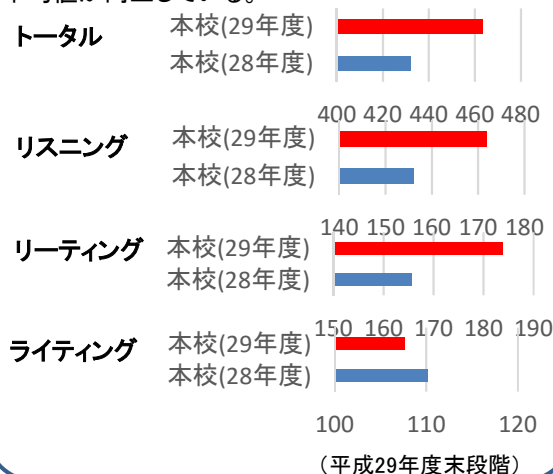
- ・スピーキング等のパフォーマンステスト(1年生)を実施した。
- ・評価の公平性をはかるために構成や情報量の基準を設けた。

○授業改善のための研修会の実施

- ・英語科教員9名中5名が公開授業を行い、それぞれの教員が課題を認識し、授業改善を行った。
- ・授業改善のための研修会を年間で12回実施し、音読やラウンド制指導法等について学んだ。

成果①

◎ GTEC for STUDENTS (1年次)において、前年度生徒よりもトータル、リスニング、リーディングの3点で平均値が向上している。



成果②

- ・ CALL教室の活用により、授業でのインプット活動の質が向上したことで、生徒の語彙の定着や読解と読むスピードが上がったと感じられる。また、録音した自分の声を確認することで、英語の強弱やリズム、イントネーションを意識して生徒が発音するようになったと感じられる。
- ・ 外部アドバイザー等による学校の実態に合わせた指導助言等で、アウトプット活動につなげる指導手順を教員間で共有でき、より同僚性が高まった。
- ・ 研修で言語習得理論に関する専門的な知識を獲得でき、ICT教材を改良し効果的な授業改善を行うことができた。

今後の課題・方向性

- ① CAN-DOリストの意義の再認識と活用・改訂・共有
 - ・ 長期的で体系的な計画、単元の指導計画の再認識
 - ・ CAN-DOリストに基づいたパフォーマンステストの継続した実施とその評価の検討
 - ・ 適切なパフォーマンステストが設定できているか絶えず確認し、教員間及び生徒間での共有も行うことで、評価の妥当性・信頼性・公平性を高める
- ② ICT教材を効果的に取り入れた授業内容の検討
 - ・ 更なるICT教材の開発
 - ・ 生徒の英語による言語活動を確実に設定した授業を設計する
- ③ 英語科教員の不断の努力
 - ・ 4技能の総合的な育成を目指し、引き続き積極的な授業改善等の研鑽をする。